

劍道部々報

— 昔節八年全國に覇を唱ゆるまで —

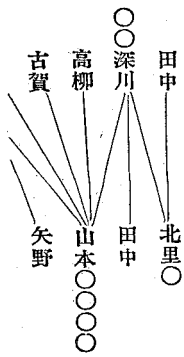
- 委員 有田 正義
宗 敏 雄
選手監督 西 田 鏡

○武者修業

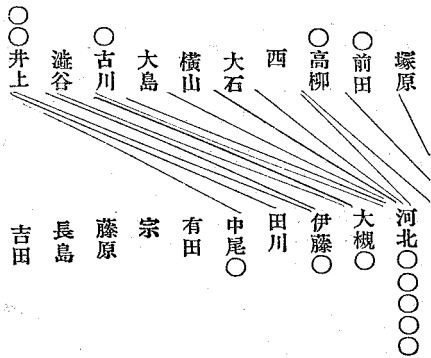
三月三十一日、春休みを利用して我等は佐賀、福岡小倉方面に武者修業を執行した。参加者は大楠師範植田豊先輩以下十六名の大多数で三月三十一日、新興の氣に満ちたる我等は歩武堂々と上熊本を出發し佐賀に向つた。

翌日直ちに佐賀武徳會支部有段者と試合を行つた。経過左の如し。

佐賀武徳會 ◎五高



部 報



新進の氣説、山本河北の奮闘は流石の佐賀健豪を一驚せしめた。試合終了後猛烈なる地稽古を願ふ、試合に負けたりと雖も、彼等の鋭峰は當るべからざる程のものありき。

四月二日

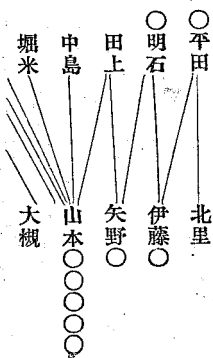
鐵路をかりて一氣博多に着く。一先づ平野屋旅館に寛ぎて後福岡武徳會道場に行く。こゝは毎年九大主催の大會のある所、曾ては先輩の勝利の美酒に酔ひし地である。都合により試合をせず直ちに地稽古をし

て戴く。こゝは由來劍道の盛んなる所なり中野先生を始め、老練たる角田先生の鋭き猛襲には流石の肥後若人も打ちのめされたされど技にて劣れ我等が意氣は著しく、先生等の稱讃せられる所であつた。忙はたいしき旅は續けられる。明日は北九州小倉だ。小倉は去年の武者修業にてこれ又大いに鏝はれし地。

四月三日

午後二時小倉着、直ちに小倉中學校道場に行く。去年から見知り起しのなつかしい幾多先生の御顔が拜見せられた。大楠師範の嚴父林先生を始め、八幡中學校の小城先生、東築中學校の古澤先生、小倉中學校の久芳先生等の御元氣なる御顔を拜して喜んだ。

小倉有段者會 五高



木曾

河北〇

字野

田川〇〇〇〇

〇〇上田

有田

〇大野

中尾

興田

宗

小松

藤原〇

古川

長島

〇〇〇〇谷山

吉田

相畫らず新進よく振ふ。これにて苦しかつた、武者修業も終つた。思ひ出多かりし武者修業なりしかな。

○福岡遠征

七月十二日 七高校をあとに福陵の地に向ふ。次に光榮ある遠征者の名を記す。

大楠師範、西田監督。

井上義人。有田正義。吉田道人。宗敏雄。藤原哲天。中尾三譽治。長島島光

田川博明。會田強。伊藤京逸。北里勇三。河北四郎。大概孝治。山本敏郎。

矢野秀雄。安南壽雄。田中國吉。西康

世。古賀克孝。

福陵は之れ吾人等の眼中になき所。唯京都大會に出場するまでに少しでも多く試合を積まんと目的にて、勝敗を全く超越した、元氣に満ちた働をする覺悟であつた。抽籤の結果第一回九州齒科醫專第二回佐賀高校と對戦する事になつた。

七月十三日

◎五高

九齒

〇北里

高山

〇〇河北

吉田〇

〇中尾

坂口

伊藤

久我

〇〇田川

前田

〇〇宗

中園〇〇

會田

河野

藤原

田中

吉田

竹下

井上

梅原

九齒は到底我軍の敵ではなかつた。先鋒北里は、恐らく、大場所を踏んだのは今度

が始めてであつた。幾分彼の使ひ振りには危い所が見えた。一人抜いたもの、腹が据つてゐない様子が見えて心細かつた又今まであまり振つてゐなかつた宗が阿修羅の様に荒れだして、大なる自信をつけたのは、我軍に取つて、此上もない強味となつた。

對佐高戦

彼は九州男子の華だ。彼等の研ぎすました鋒先には、凄いものがあるであらう。優勝を期して北上してゐる彼等の面上には強い閃があつた。

◎五高

佐高

〇〇北里

白濱

〇〇大概

中野

〇中尾

三好

〇有田

北崎〇〇

〇〇會田

大久保〇

〇〇田川

永江〇

宗

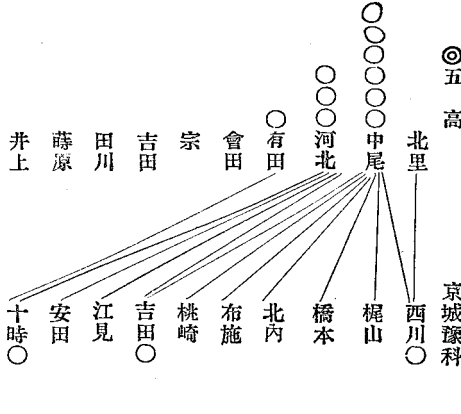
下川

藤原

小川

された。

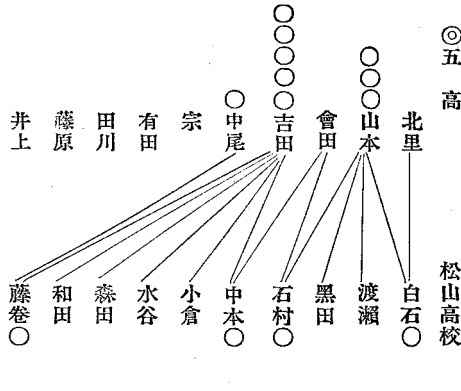
七月十九日 抽籤の結果、京城大學豫科及び松山高校と對峙する事になつた。經過左の如し。



見よ如何に我等の劍の鋭きかを、而して中尾の働き如何に物凄きか。彼は日頃鍛へし籠手攻めを以て、徹頭徹尾終始して成功したのである。實に彼は、この籠手の研究には、學業を擲ち幾十通りの攻め法を考案したのである。然るに今や彼は成功せり

彼の得意や知るべし。次に又新進の河北、意外に手剛く敵全く顔色を失ふ。

七月二十日

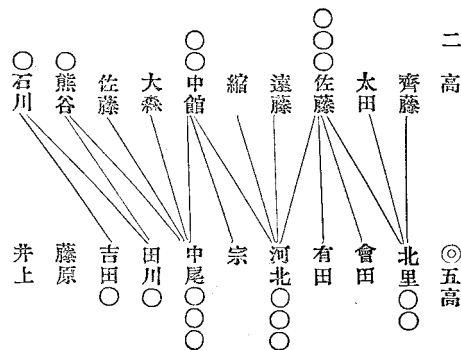


先鋒、北里、時至らざるか振はず。新進山本の働き凄し。又巨人吉田、長軀を利用して、敵を奔弄して斬る事五人、遂に敵の牙城に迫る。哀れ、我敵軍、中堅、中尾の籠手にとりめを刺さ、れぬ。

抽籤あり。結果仙台の雄、二高と對す。二高は嘗ては、天下に羈を唱へし豪の者、

今年こそは我れ勝かたんと、新興の氣を以て我等に當らんとす。

七月二十一日



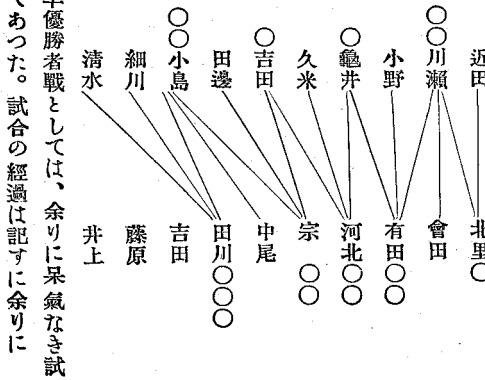
彼等も亦我等の敵には非ず。見よ、先鋒北里小軀よく動きて敵二人を斬つて退く。

河北、中尾相變らず奮闘し不戰二者を残して凱歌を擧ぐ。されど心せよ、明日愈準優勝戦だ。功漸く成らんとする我等自愛すべし。相手は北陸の雄、天下の劍豪、四高な物の美事に倒したる、新氣鋭の愛知醫科大

學豫科である。四高と愛知との試合は、審判物言ひ付き、の歴史的な試合であつた。新進とは言へ、四高を破りたる者、彼にも又、鍛へたる練磨の劍ある事、小敵を侮るべからず。大敵を恐るべからず。大膽にして細心もつて、大成すべきのみあ、恐しき思ひ出多き日は近づかんとする。

七月二十二日

愛知醫學科 ◎五高



準優勝者戦としては、余りに呆氣なき試合であつた。試合の経過は記すに余りに

部 報

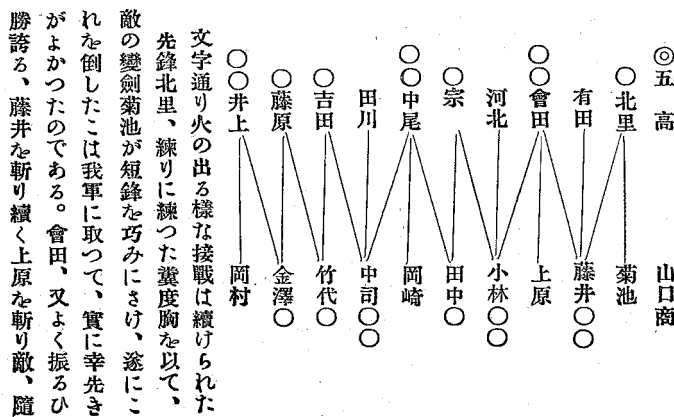
單である。唯、こゝに、特筆すべきは、和田の二刀である。未だ、稽古不十分なる二刀を取りて、よく戦ひ、敵二人までを倒せしは、驚くべき事であつた。彼は實に力の人である。偉大なる臂力を以て敵を斬つて行く所、實に小氣味よきものありき。

愈々午後三時より、優勝戦となりぬ。我等が軍は悠悠追らざる態度もて、こゝまで進んで来た。相手は何者ぞ。あ、皮肉、去る日、福陵にて惜しくも敗を取りし、彼山商軍であつた。彼又、巨將金澤を擁し、大將岡村を戴きて、群雄を蹴散らして、今や堂々我等再び相見ゆする我等が若き血潮は、雪辱の念に、沸り、煮ゆかへつた。彌が上にも心を鎮め、靜かに冥想沈思の坐禪をした後從容として、部歌を歌ひつゝ、戦に臨む。戦はずして既に敵を呑むの概あり道場に至る。敵既にあり、焦心頼りに我等が遅きを啣ち居りしとか。哀むべき彼等が心情汝等宮本武藏の戦法を忘れしか。兩軍靜かに對峙す、審判は内藤範士に、高柳先生である。戦の結果は今より、少くとも二時間の後には定まるべし。果して何

れに勝闘あがるか。あゝ。緊張の一時間、試合は一進一退勝敗何れとも豫想し難し。

優勝戦

◎五高



文字通り火の出る様な接戦は續けられた。先鋒北里、練りに練つた養度胸を以て、敵の變劍菊池が短鋒を巧みにさげ、遂にこれを倒したこは我軍に取つて、實に幸先きがよかつたのである。會田、又よく振るひ勝誇る、藤井を斬り續く上原を斬り敵、隨

一の圍將小林に破る。小林我が時至れりとはかり荒れまはる。流石の河北も、倒れ、悠々として、飽くまで落ち着き拂つて、これに當る。無智の諸勇何ぞ我が宗の敵ならんや瞬時に面二本を取られて退く。小林若し宗を斬らんか我軍の運命は全く絶望に陥るを免れざりしなり。此の際に當り宗の武勳赫々たるものあり。

田中岡崎我が中尾の爲めに軽く押さへられ、空しく凡退す中司、田川と對す。田川は曾て、敵の心膽を寒からしめて、「我等田川氏に勝たず」と叫ばしめし蒙者なり。今や中司福岡の復讐をなさんと、巧みに田川が虚をつき、千の秘術を盡し遂に田川を陥し入る。田川暗涙を呑みて退く。されどこは實に彼山軍の氣をゆるむるに大なる力ありき。田川の討たれしを見て敵軍一方ならず喜び我事成ると自負す。

この自負や實に彼等が敗因となりしなり吉田田川の仇と、猛襲中司を倒し、竹代に向ふ、竹代は千軍萬馬の強者、吉田、退き我が副將藤原出でぬ。

後に残るは大将井上獨り。我等は藤原に多

大の望みをかけてゐた。が残念。竹代を斬りて後ち金澤に倒る。老巧なる金澤は福岡の復讐をなすべく、乱れんとする構を立て直し藤原を攻む。遂に藤原、彼に名を成さしめぬ。

大将井上、莞爾と笑みて、金澤に對す。狼狽す。されど不幸彼の狙ひし籠手は當りぬ。太刀打數合、金澤は叫んだ。「貴殿面の紐解けたり、結ばれよ。」知らず彼れ、梶原景季の古智を傲ひしし吾や。其の時我が井上は靜かに、而して嚴然と叫んだ「構はぬ來れ好漢!。」この落着その莊重さ。脆くも金澤は倒れぬ。何ぞ彼敵せんや。

敵大将岡村長身もてやならに當る。井上は福岡に於けるあの見苦しき敗北の復仇を致し矣んと、怨みの太刀風物凄く岡村又悠然として、對す。暗風雲低迷、俄然、我は進む。岡村得意の面にて、井上が、頭上を狙ふ。井上軽くこれを受けて、素早く、息をも附けぬ早業もて胴を抜く。こゝに於いて、岡村全く動搖す。我が、井上籠手を狙ひて成功す。一本一本勝負となる。場内極度に緊張す。靜肅なる最後の戦、過去一

ケ年の努力水泡に歸するか、然らずして功成るか。

やがて岡村背立ちて井上が籠手を斬らんす數合、大刀打ちあり。その最後の瞬間井上が竹刀は引かれた。岡村ははずされて、残念と体の構をなほさんと後に身体を引く時、井上が、鋭き延びは美事に決まり、岡村が面を發止と打てり。

審判は明らかに我等が勝を宣しぬ。嬉しき哉我等が霸業遂に成りぬ。最後の瞬間我等は我れと我身の存在を忘れ茫然自失爲す事を知らず、唯滂沱として涙我等が頬を流る、のみ。

苦節八年忍從八年の雪辱は美事になされた。先輩の苦き、歴史は今や燦として輝く我等が、龍南建兒に對する幾度かの誓ひは漸くこゝに果された。されど諸兄よ、この偉大なる勝利の裡には、血の滲むが如き努力と、不斷の熱心と尊き犠牲とそして固き々々團結がかくれている事を記憶せられよ。最後に龍南健兒の偉大なる沈黙の後援と御好意とに對して、我等は滿腔感謝を捧る。二五八六、九、二五 幽心生記